

計算値の4つの基本となる型から変動と方向性を見定める

■ 計算値は波動論を抜きにして論ずることは出来ない

これまで基本三波動Nについて述べてきました。基本数値、対等数値でNを形成した時には、相場の変化に特に注意を払う必要がありますが、この事は既に理解いただいていると思います。

一目均衡表は良く知られるように、相場の時間関係を最も重視しているのですが、方向を問題にする以上は、当然、価格も無視するべきではありません。今回はこれまで先送りにしてきた均衡表の計算値について解説します。

時間関係が、波動論と切り離せない関わりがあるように、計算値もまた波動論を抜きにして論ずる事は出来ません。ですから、これまでと同様に

1. 動く相場=基本波動Nを形成していく変動

2. 動かない相場=中間波動として認識されるP、Yなどのもち合い相場の二つに分けて考えていきます。

図1は一目均衡表の計算値のうち、最も基本となる4つの型であります。それぞれあるポイントが価格の中心となって三波動Nを形成しているのですが、基本数値、対等数値と同じように、この計算値を達成した三波動のDのポイントが相場の分岐点となりやすいと理解下さい。E計算値はABの値幅をBの値段に足したもの、N計算値(これは三波動Nと同じ記号で言い表しますの混同しないで下さい。ここでは三波動N、N計算値と分けて表現します)はABの値幅をCの値段に足したものの、V計算値はBCの値幅をBの値段に足したものの、NT計算値はAの値段とCの値段の値幅をCの値段に足したものとなります。

Aを500円、Bを600円、Cを570円として、これらの計算値を算出すると
E計算値は $(600-500)+600=700$ 円
N計算値は $(600-500)+570=670$ 円
V計算値は $(600-570)+600=630$ 円
NT計算値は $(570-500)+570=640$ 円となります。

このようにDに至る以前に計算値を出しておいて、実際の変動を見定めていく事になりまして、方向性を判断する目安として活用します。ここに挙げた例は上げ相場の計算値となりますが、下げ相場も同様です。図2を参照下さい。

図3は、2003年11月19日から2004年4月26日までの平均株価日足の略図です。上げ相場は安値、高値の切り上げですので、相場が進むにつれ出現する安値を、それぞれ相場の起点と考えてみる必要があります。その結果、数多くの計算値を出していく事になります。例えば12月2日、12月10日を出した計算値は単純に11月19日から12月2日までを第一波動とすれば良いので、
E値 = $(10552-9614)+10552=11490$ 円
N値 = $(10552-9614)+9859=10897$ 円
V値 = $(10552-9859)+10552=11247$ 円となります。

しかし相場が安値、高値を切り上げて進んだ1月20日での計算値は、12月19日、12月10日、11月19日という3カ所の安値が、それぞれ相場の出発点である可能性があるために、E計算値もN計算値も、この図表では3つずつ導き出す事になるのです。

図3の様に、数多くの計算値を出すと、1月20日のV計算値12087円と、2月26日を起点とした3月12日のN計算値12071円のように、ほぼ一致するケースが見られます。

基本数値、対等数値の一致が変化日として重要であるように、こうした値段には注意しておく必要があります。個別銘柄、その中でも低位株の変動では、計算値の一致がその後の高値、安値を強く示唆する場合がありますので、よく研究下さい。

あらかじめ計算値を出したとして

も、実際にその値段を達成するかどうかは定かではありません。しかし計算値を実現した相場と、そうでない相場とは、その後の変動が異なるものとなります。

図1の4つはそれぞれ計算値を達成した三波動Nであります。このうちEの

図1

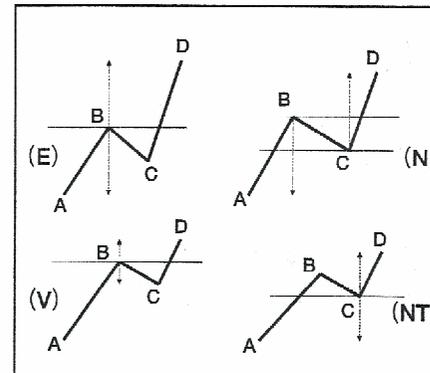


図2

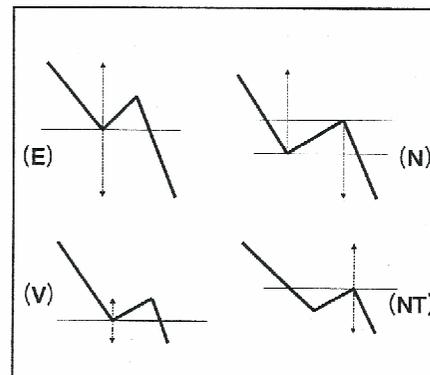
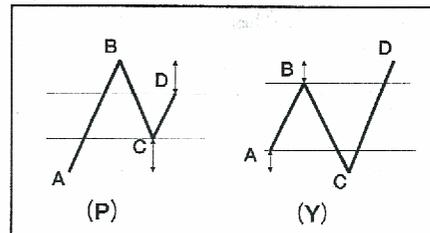


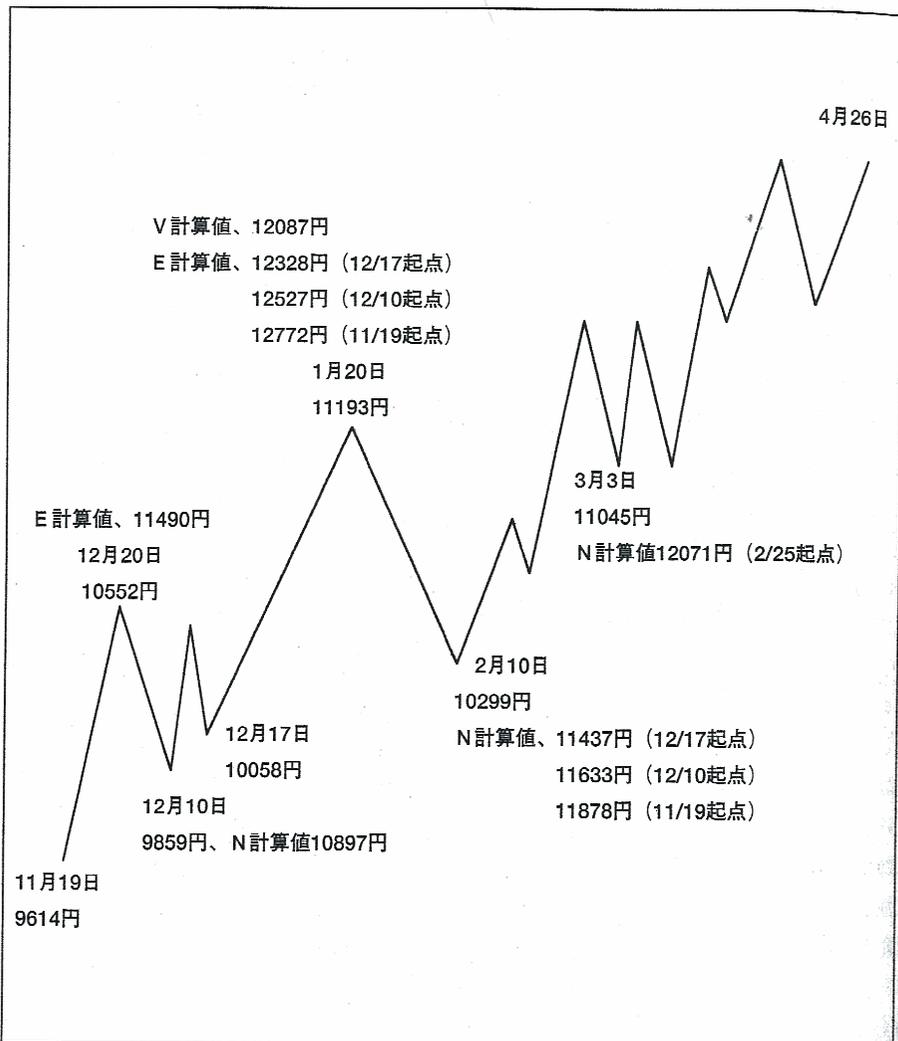
図4



場合について考えてみましょう。これはABの値幅と、BからDまでの値幅が同じですから、AからDまでの変動は上げ相場ですが、Bを中心的価格とした変動であるといえます。

もしもDからの下げがAの値段まで下げて来たときには、その時点ではBの値段を一種の相場水準とした、もみ

図3



合い相場という事になり、相場水準が動かないと言えます。一方、Dからの下げが押しとして、Bよりも高い値段で止まるならば、つまり新たに三波動Nを形成していくならば、この場合は中心的価格（相場水準）が上げに動く事になります。

前回、もみ合い相場は中心的価格が

動かない変動であり、上げ相場、下げ相場は中心が上か下かに動く変動である、と述べましたが計算値の達成によってこれをチェックする意味があるのです。

計算値を達成できていない、という事は、その事自体、Bの値段が相場の中心的価格ではない事を表しています。ですからD以降上げ相場となるため（中心が上に動くため）には、計算値を実現させた場合よりも浅い押しでなければならぬ事も理解できるでしょう。

■ P波動は中心に向かって収束 Y波動は拡散するもみ合い

さて、そのほかの計算値ですが、P波動、Y波動の計算値について簡単に説明しておきます。P波動、Y波動ともに中間波動でありまして、要するにもみ合い相場です。

既に述べたようにもみ合い相場はある値段を中心として、高値と安値を形成していく変動ですから、P波動は中心値に向かって収束するもみ合い、Y波動は拡散するもみ合いと言えるでしょう。

この場合、一目均衡表のいずれかの線が、中心的価格を示唆している事が多いのでありますが、図4のような計算値を併用してもみ合いにおける高値、安値の目安とするものです。図4でのP計算値で導き出したDの値段は、AからCまでの値幅をBの値段から引い

たもの。Y計算値で導き出したDの値段は、AからCまでの値段をBの値段に足したものとなります。例えば2004年9月28日10735円をA、10月7日11410円をB、10月25日10575円をCとしてY計算値を出しますと11572円となりますが、今年1月11日高値11580円が重要である事がわかります。この場合も、計算値を達成しただけでは9月28日から10月7日までの価格帯を中心としたもみ合いの範疇を超えた事にはなりません。

以上、簡単に計算値について述べましたが、時間関係について充分理解していない方は、単なる目安としてのみ活用する方が無難です。計算値は達成するかどうか確実ではありませんが、時間は確実に経過しますので、初心者には時間関係を徹底させるべきであります。

これでひと通り一目均衡表の基本的な考え方について説明を終えましたが、これらの知識をどう活用していくかは皆さんの研究にかかってきます。とはいえ変化日に対する理解なしに、これらの知識を有機的に機能させる事は難しいと言えるでしょう。次回は一目山人が想定した「変化日」という概念について解説します。

一目均衡表公式ホームページ
<http://ichimokusanjin.hp.infoseek.co.jp/index.html>



相場変動で「変化日」の捉え方が左右することを理解しよう

■ 目的は上げか下げかを明確に決定すること

これまで、一目均衡表で大切な時間関係および計算値の考え方、さらには均衡表の波動論について、一通り説明してきました。今回「変化日」について解説する前に、一目均衡表の相場変動論についておさらいしておきましょう。まずは以下の3点について確認したいと思います。

1、 上げ相場、下げ相場ともに基本波動Nで捉えることが出来ます。

図1をみて下さい。この場合BCの押し、あるいは戻りは一目均衡表各線のいずれかになりやすい。

またAからDまでの時間関係は対等数値、基本数値の時間関係となりやすく、E、N、V、NTいずれかの計算値で迎えたDでは注意が必要となります。

2、 もみ合い相場は中間波動P、Yなどで捉えることが出来る。

図2をみて下さい。この場合BやCが均衡表各線と一致するケース（均衡表が押しとしても戻りとしても機能している）と、もみ合い相場の中心的価格Xに均衡表各線が位置するケース（均衡表が押しとしても戻りとしても機能していない）がある。

AからDまでの時間関係は基本波動Nと同様に基本数値、対等数値が働きやすい。

Dの価格はXを中心としたもみ合いの範囲内で落ち着きやすい。（P、Y計算値）

3、 もみ合い相場は将来において必ず上げ相場、または下げ相場として認識される。またいったん上げ相場、下げ相場として捉えた変動が将来においてももみ合い相場を演じる可能性は常にある。

一目均衡表で相場を押し量る目的は、当然のことながら上げか下げかを明確に決定することです。ですから、前述した1から3まで複雑なようですが、単純には、これ以上は上げない、または下げないことを確認して、その離れに付く、ということが重要となります。が、これは次のような一目均衡表の型に象徴されるものとなります。

一目均衡表の型

①、準備構成（基本数値による底値固

め）

②、一目均衡表好転（基準線、転換線の逆転）

準備構成後、実線が均衡表を割り込まない条件で、買いのサインとなります。

■ 「変化日」は固定的に相場転換を示唆していない

抽象的過ぎてわかりにくいので、日経平均株価の日足に即してみよう。

図3を御覧下さい。これは昨年8月16日安値から今年3月7日までの日足均衡

表であります。10月25日の安値から12月1日安値までは基本数値26日となっています。

さらに12月10日安値までは基本数値33日で準備構成を経て、その後、実線が均衡表各線を上抜いて、11月16日高値を上抜いた日に均衡表を好転させることとなっています。

この変動は前述の1から3までを具体的に説明するものとなっています。8月16日安値から10月7日高値まで37日は、10月7日から12月1日まで37日の対等数であり、さらに10月25日から12月16日まで37日となっています。

図1

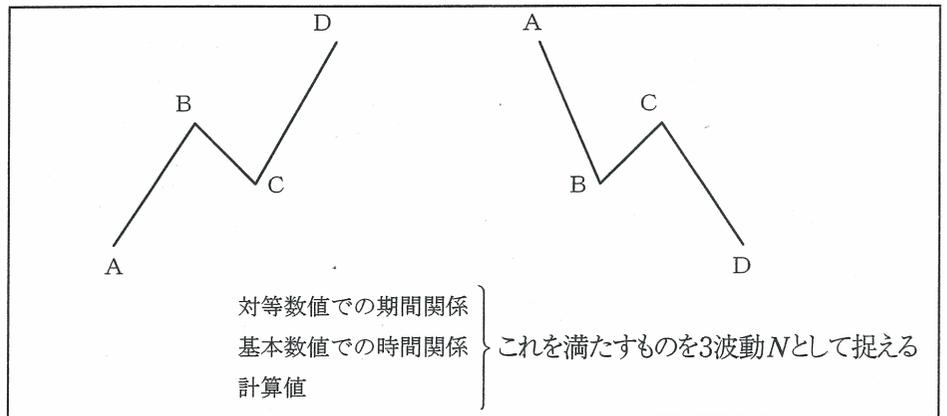
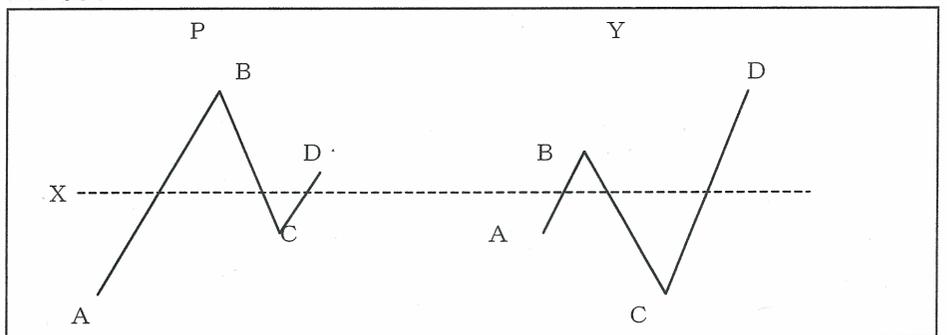


図2 中間波動



8月16日から12月16日までの変動は一日均衡表が押しとしても、戻りとしても機能しない状態で中間波動Pの連続であります。が、8月16日からの中間波動の終了として重要な、12月16日に転換線が押しとして働いていることから、次の陽線が先行スパンを上抜くを見て、当面の上げ相場は判断できるのです。

12月16日に出発した相場は、3月7日まで均衡表の基準線および、転換線が押し目として機能する、上げ相場でありました。が、前回説明した計算値を踏まえると、1月11日高値、2月21日高値、また3月7日高値ともに8月16日以前の変動の影響力を脱するものではなく、結局もみ合い相場の範疇を超えるものではありませんでした。

3月7日の高値からの変動は3月30日ま

で17日間、先行スパンの上限まで下げ、以降17日間で二波動を形成し、計33日間の下げで昨年暮れと同水準の位置にあります(5月13日現在)。結果的には去年4月高値から、5月17日安値の範囲でのみ合い相場でありますので、今後は戻りの位置を見定めて方向性を判断していくことになります(株価予報の発売日には既にはっきりしているでしょう)。

このように、一目均衡表を使って相場変動は合理的に把握することが出来るのですが、相場の方向を常に決定できる訳ではありません。

ある安値、または高値を起点として定めたいうで、上げ相場ならばいつまで上げるべきである、下げ相場であればいつまで下げるべきである、という想定は、基本数値と対等数値を使えば可能であります。が、実際の変動が必

ず、その通りになる保証はないのです。

つまり一目均衡表でいう「変化日」は固定的に相場の転換を意味しているものではありません。

一目均衡表はあるポイントを相場の起点として定めた場合の、相場の節目となるべき日を想定するのであります。実際の変動の仕方によっては、より確かなものになってくる場合もあります。その一方で無視して違う視点で変化日を定め直す必要もでてくるのです。

■ 相場の方向性を捉える 態度が重要

もう一度、図3を御覧下さい。昨年12月から出発した相場で上げ相場を判断した以上、いつくらいまで上げるかは当然問題となります。この時、8月安値、10月25日、12月1日、12月10日の安値それぞれを起点として変化日を想定します。8月16日から10月25日までを二波動とするならば、最大で10月25日から48日間は上げると想定出来ます。

10月25日を起点とするならば、12月1日から26日間で最大の時間となります。1月11日高値は12月1日から26日目、10月25日からは51日目となっており、8月安値、10月25日安値を起点とした三波動の完成点となっています。

8月16日安値からの時間、10月25日安値からの時間は経過している訳ですから、1月11日からさらに上昇する場合には、12月1日、12月10日、または12月16日を起点として、押しの時間を見て、

変化日を出すのです。

1月11日の高値は安すぎることで、その後の再出発に時間がかかりすぎていることは問題であり、この現れ方は、12月1日、あるいは12月10日から1月11日までの一波動が時間のうえでも値幅のうえでももみ合いの影響下にあることを強く示唆するものであります。ですから、この後の上げは、いつどのような下げ方をしてもおかしくない、という視点で見えていくべき相場だったと言えます。

つまり変化日は、変動によって意味も変わるのです。今回は、経験の浅い人にとっては難しい解説だったかも知れません。

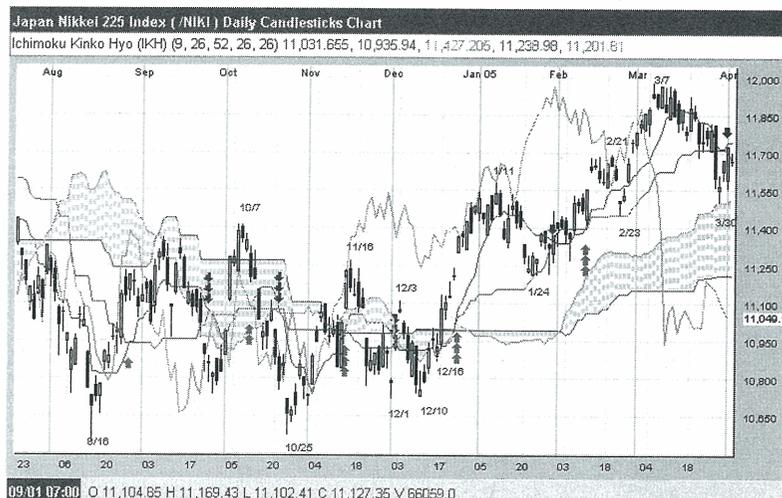
今回は一目均衡表の売買の型をより簡単に解説する予定ですが、読者諸兄は御自身で変化日を想定して、その変化日においてどのような現れ方をしているか確認して下さい。

買える相場、つまり上げる相場の典型は、下げの三波動の形成によって下げ償却をきちんとしたうえで、均衡表を押し目としながら上げていくのです。値動きを期待するのではなく、上げの方向性を期待する、という態度で臨めば、それほど間違えることはないはずであります。

一目均衡表公式ホームページ
<http://ichimokusanjin.hp.infoseek.co.jp/index.html>

●ブログ＝一目均衡表日記を掲載中

図3 (フォーチュンキャピタル社 プロスティクス使用)



売買を決定できる 「変化日」とは 相場の離れを 確認出来る時

■ 買い決定に至る順序を 型にして整理する

これまで私は日経平均株価の下落を想定していました。2003年4月安値から2004年5月安値までを二波動と捉え、2004年5月安値を中心点とした変化日は6月2日であり、先行スパン上限位置とするこの日から4月21日安値を割ってくる、と考えておりました。

6月2日の変化日を中間波動終了の節目と考えた場合、時間をかけずに4月21日安値を割るようであれば、均衡表各線はすべて悪化した状態であり、しかも3月7日からの下げ償却が終了していない、との判断が導き出されます。このため少なくとも3月7日起点、あるいは4月8日起点とした下げの三波動構成までは「下げる」と判断できますが、結果的には6月2日変化日から、6月9日までが押しとして働き再出発となりました。

6月9日は、4月21日安値から32日目にあたり、3月7日から4月21日までの、下げ時間33日に対応する変化日でもあります。このポイントから11日間の上昇によって「下げ相場」の可能性は否定され、「もみ合い相場の継続」が「上げ相場」という判断に変わるので

す。変化日を安易に転換日として捉えるべきではないのですが、前回に引き続き、変化日について考えてみましょう。

図1は前回説明した一目均衡表の売買の型です。

- (1) AからDまでの三波動の形成でDでの下げ止まりが期待できる
- (2) DからFまでの準備構成（基本数値での底値固め）でDの下げ止まりを判断する
- (3) Gでの均衡表好転を上げ相場と判断する（買いと判断する）

買い決定に至る順序を型として整理するとこのようになります。

(1) の三波動の完成はDからの反発を期待できる状態です。これはAからBまでの下げの影響力が三波動の完成で、一応処理された状態、という形です。もしもDが底値となるのであれば、D以降上げの三波動を構成していくこととなります。

Dが底値でないならばD以降CDを第一波動とするか、ADを第一波動とした下げの三波動を構成していくこととなります。

そこで (2) のようにDからFまでの

底値固めを確認し、下げの三波動が連続していく可能性が排除されたところで、(3) 均衡表好転を上げ相場のサインとして捉えるのでありますが、一般的に準備構成は基本数値の日数でなされることが典型的です。

場合によっては均衡表好転を待たずに買いを判断できることもあります。均衡表の遅行スパンは基本数値26での離れを限定的に見るものでありますが、日数を17、42、65などに変えた遅行スパンが時に有効であるのは、準備構成の期間が基本数値で決まりやすいことと無縁ではありません。

■ 均衡表好転買いと 判断しなかった理由

この売買の型はそのまま今回の上昇相場に当てはまるのが理解出来るで

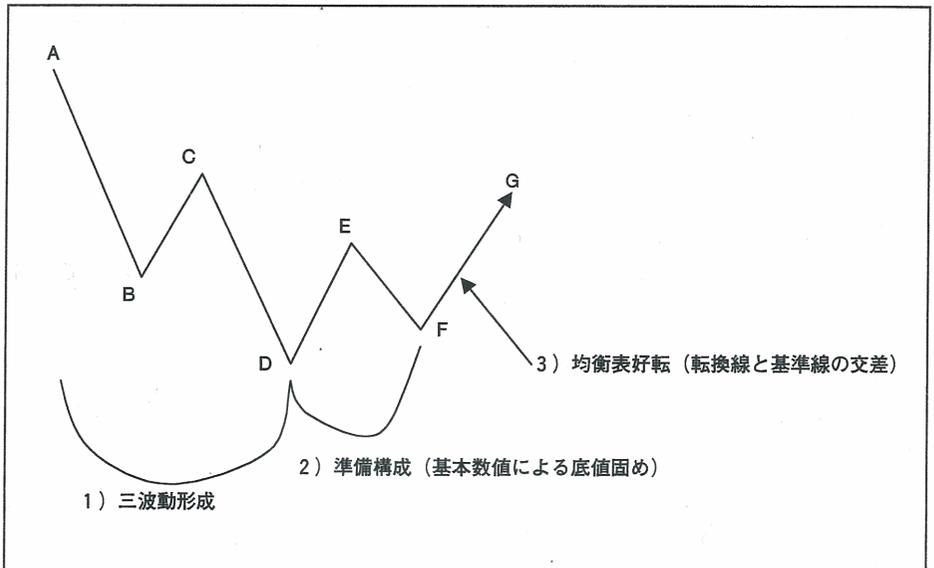
しょうか。図2は日経平均株価日足の一目均衡表グラフです。

- (1) 3月7日から17日間の下げに対し、3月30日から4月21日まで17日間という、基本数値、対等数値での三波動形成。
- (2) 4月21日から基本数値9日目、17日目、26日目、いずれも安値を割っていないことに注目します。底値固めを4月21日から5月17日までの15日間と置くか、5月26日までの22日間と置くならば、
- (3) 5月26日以降の均衡表好転（基準線と転換線の位置の逆転）で買いということがいえます。結果的には8月16日現在まで上げを続けていますが、私自身は5月26日以降の均衡表好転を買いとは判断出来ませんでした。

それは既に述べたように次の二つの理由によります。

- (1) 3月7日高値から4月21日までは三

図1



波動の時間関係であるとはいえ、4月8日からの下落幅が大きすぎるため、下げの三波動が連続する可能性が大きい。これは21日からの上げ方にもよるが、5月10日までの戻りは基準線にも達しないものであるから、5月17日の段階では下げの三波動形成を考える方が自然である。

(2) 前述のように大きな中間波動の時間関係では6月まで時間が残されているために、それまでに下げ相場を否定する動きがなければ、より下げ相場を示唆してくる

下げ相場を否定する動き、とは、単純には均衡表のいずれかを簡単に上抜いてくるような上げを演ずることであるので、6月9日からの上げで先行ス

パン上限を上抜いたことで、はじめて想定が変わってきます。

このように変化日はその日を迎えた直後の変動が極めて重要でありまして、単純に仕掛けのポイントとすべきではありません。

変化日設定は、もし相場変動の起点がこうであれば、この日にはっきりとした表れ方をするはずである、という暫定的な仮説ですので、相場の経過とともに重要度、意味合いが変わってくるものであることを理解ください。

■ 転換サインを合理的に活用できる

それでは変化日で売買を決定できるケースとはどのような場合でしょう

か。

これは一目均衡表図表の考え方とも関係することですが、変化日から相場の離れを確認出来る時にはじめて合理的判断となりえるのです。

相場変動は上げ相場と下げ相場で成り立つ、という考え方が一般的ですが、この捉え方は転換サイン=売買決定サイン、という固定化に陥りやすいのです。つまりケイ線の騙しに必ず直面することになりますが、山人はもみ合い相場と離れによって成り立つ、という捉え方をすることで、転換サインを合理的に活用出来る、と考えました。

相場の天井も底も一種のもみ合いと見なしたうえで、その離れを相場の方向として判断するならば、転換サインがうまく機能する場合も、機能しない場合も適切に対処することが出来るので、結果的に相場を判断保留の状態と、判断出来る状態に分けるといいます。

以前解説しましたように、上げ相場、下げ相場、もみ合い相場、押し、戻り、という概念は両義的意味を持ちます。離れにつくというだけでは、具体的に対処が出来ません。そこで時間、値段、半値関係、という制限を与えたうえで、相場の方向性を具体的に浮き彫りにすることが、一目均衡表の本当の活用方法であります。

さて変化日をどのように決めるべきであるか簡単に説明しておきます。

これは重要な高値、あるいは安値を起点として、基本数値、対等数値をあらかじめグラフに書き込みながら想定していきます。さまざまな起点からの変化日の一致する日は、特に重要であることが多いので、例えば4月21日から89日目は昨年10月25日安値から今年3月7日高値までの上げ日数89日に相当するものであり、昨年12月1日安値から今年5月17日安値の時間89日に相当しています。10月25日を起点としても、12月1日を起点にしても、三波動の終了時間として矛盾のないポイントであります。この様な日を変化日として定め、変化日での変化の仕方によって判断を決定、変更するのです。

これまでの9回でひと通り一目均衡表の思考方法について説明を進めてきました。

慣れない方は難解に感じたかと思いますが、紙面の関係で、言葉が足りぬ部分も多かったと思います。

次回からこれまでの解説をもとに、より簡単に、より具体的な解説を進めていきます。

一目均衡表公式ホームページ
<http://ichimokusanjin.hp.infoseek.co.jp/index.html>

● ブログ＝一目均衡表日記を掲載中

図2 日経平均株価日足均衡表グラフ (プロスティクス社)

